

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 25 日現在

機関番号：31203

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520032

研究課題名(和文)「情動的言語使用」の哲学 - ニーチェと/の「コミュニケーション理論」

研究課題名(英文) The philosophy of affective use of language: Nietzsche's theory of communication and its possible application to the contemporary communication theory

研究代表者

齋藤 直樹 (Saito, Naoki)

盛岡大学・文学部・教授

研究者番号：90513664

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円、(間接経費) 720,000円

研究成果の概要(和文)：本研究から得られた第一の成果は、「根源的な身体衝動」をめぐるニーチェの一連の思想に「言語論」的な観点からアプローチすることを通じて、ニーチェの哲学を「情動的言語使用の哲学」として新たな視点から体系的に再構成したことである。

また第二の成果として、合理的な言語使用を前提とした「他者の了解」から身体的共感に根ざした「他者の承認」へと問題の中心をシフトさせつつある現代の「コミュニケーション理論」の展開、とりわけその「承認論的転回」をめぐる議論との比較検討を通じて、「情動的言語使用の哲学」が持つ現代的な意義を明らかにしたことが挙げられる。

研究成果の概要(英文)：The first result of this research is that Nietzsche's philosophy was systematically constructed as the philosophy of the affective use of language through the linguistic approach to Nietzsche's thoughts about the dynamism of the primitive physical impulse.

And the second result is that the contemporary significance of Nietzsche's philosophy of the affective use of language was revealed from a new viewpoint by the comparison with the argument over the recognition-theoretical turn shown in the current movement of the communication theory where the center of the problem has transferred from the understanding of others on the premise of the rational use of language to the recognition of others on the basis of physical sympathy.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・哲学倫理学

キーワード：ニーチェ 言語 情動性 コミュニケーション 身体

1. 研究開始当初の背景

フランクフルト学派を中心とした「コミュニケーション理論」の展開においては、非合理主義的な前提に立脚する諸々の思想、とりわけニーチェの「認識批判」ないしは「道徳批判」の試みは常に論難的であった。例えば「啓蒙のプロジェクトの積極的な推進者」を自称するハーバースマスによれば、ニーチェは、理性の本質的属性をもつばら「自己保存を目的とした対象の支配」と一義的に規定したが、社会的解放のプロジェクトを実現する「了解志向型の社会的行為」ならびにこれを支える「コミュニケーション的理性」の所在を正当に評価することができず、結果として、毀損されざる自然との身体的融合（「ディオニュソスの陶醉」）を夢想する神秘主義的思想の域を越えることができなかつた、と評価される。（cf., Jürgen Habermas, *Theorie des kommunikativen Handelns*, Band1, Suhrkamp, 1981, S.505-534. / *Der philosophische Diskurs der Moderne, Zwölf Vorlesungen*, Suhrkamp, 1985, S160ff.）

しかしながら昨今、そのような論難を展開するハーバースマスの立場それ自体が、すなわち、社会的相互行為の本質を合理的な言語使用のうちに認め、間主体的な交流の内実をもつばら「言語行為の語用論的条件」に依拠して分析しようとする「討議理論」の枠組みそのものが、アクセル・ホネットに代表される「フランクフルト学派第三世代」の論者たちからの新たな批判に直面している。ホネットの批判の主要な意図は、狭義の認知的な次元に還元することのできない、人間の身体が根源的に具有する情動的な次元に改めて着目しながら、合理的な了解を許さない異質な他者の「承認」の可能性をも正当に包含しうる、そういう仕方でのコミュニケーション理論の拡張を画策することにある。ホネット自身の定式化を援用して言えば、「ハーバースマスの一般的な言語遂行論を、社会的相互行為の規範的前提を全体にわたって解明することができるような人間学のコンセプトで置き換える」という課題（Axel Honneth, *Die soziale Dynamik von Mißachtung; Zur Ortbestimmung einer kritischen Gesellschaftstheorie*, in: *LEVIATHAN; Zeitschrift für Sozialwissenschaft*, Westdeutscher Verlag, 1/1994, S.88.）が、批判理論がいま形成しつつある問題圏の中核をなしているのである。

狭義の認知的次元に強く規定されていたコミュニケーション理論を、情動的な次元にも目を向けながら拡張しようとするホネットのこのような試みは「コミュニケーション・パラダイムの人間学的実質化」と特徴づけることができよう。しかしながらこの試みには、従来の「討議理論」に強固な理論的前提を提供していた言語哲学的考察——具体的にはオースティン/サールによる言語行為論——に対応する「言語論」が不在であつ

た。このような事態を招来している原因は、ホネットがみずからの理論構成の前提として採用した思想、すなわち、主体間の相互承認を前提として実践的自我の形成を捉えたイェーナ期のヘーゲルの思想、ならびに、若きヘーゲルの承認論を社会心理学的な手法を導入しつつ精緻なかたちで再定式化した（とされる）ミードの自我論が、「言語」の問題を必ずしも主題とするものではなかつたことにある。（Axel Honneth, *Kampf um Anerkennung. Zur moralischen Grammatik sozialer Konflikte*, Suhrkamp, 1998, S.24ff, 114ff.）結果として、彼が提示する「承認論」に関しては、合理的な言語使用の場面に局限化されたコミュニケーション理論を批判するのに急なあまり、間主体的交流の場面でも「言語」が果たしている（ないしは果たしうる）役割に関する考察が不十分であると言わざるをえない状況にあった。したがって、指示内容の概念的理解を前提とした「合理的言語使用」に尽きることのない、われわれの身体的衝動に根ざした「情動的言語使用」のあり方に注目し、これに関する哲学的考察を展開することは、極めて有意義な試みとなると考えられたのである。

2. 研究の目的

以上のような問題意識を前提としつつ、本研究は、ディオニュソスの衝動と呼ばれる「根源的な身体衝動」をめぐるニーチェの一連の思索に改めて注目し、それに「言語論」的な観点からアプローチすることを通じて、ニーチェの哲学を「情動的言語使用の哲学」として体系的に再構成することを第一の目的として掲げた。

さらにこの試みと並んで、合理的な言語使用を前提とした「他者の了解」から、身体的衝動に根ざした「他者の承認」へと問題の中心をシフトさせつつある、コミュニケーション理論のいわゆる「承認論的転回」をめぐる議論との比較検討を通じて、ニーチェの「情動的言語使用の哲学」が持つ思想的ポテンシャルを、現代的な文脈のなかで評価することを第二の目的として掲げた。

3. 研究の方法

本研究は、上で挙げた二つの研究目的のそれぞれに関して次のような個別的課題を掲げ、それらを順に遂行していくという方法で進められた。

：ニーチェの「言語論」に関する体系的
研究

（1）「意識的志向性」に先行する「身体的衝動性」の所在を主題化する、ディディエ・フランクから現代のフランス現象学者が提示するニーチェ解釈（cf., Didier Franck, *Dramatique des phénomènes*, Collection

<Épiméthée>, Presses Universitaires de France, 2001.) を検討し、彼らが示す知見を導きの糸としつつ後期ニーチェ思想を精査することを通じて、「情動性」をめぐるニーチェの思索の基本的かつ最終的な立脚点を現代的な見地から明らかにする。

(2) 初期悲劇論の中に見出される「言語」に関する一連の考察 (ex., *Friedrich Nietzsche: Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe in 15 Bänden*, Walter de Gruyter, 1980, Bd.1.572ff., 12<1>。以下、本全集を *KSA* と略記) に注目し、これを上記(1)の研究成果から遡行的に評価することを通じて、ニーチェ思想全体を視野におさめた彼独自の「言語論」を体系的に取りまとめていく。(と同時に、下記で得られる研究成果をふまえながら、ニーチェの「言語論」が、<情動的言語使用に依拠したコミュニケーションのかたちを探る>という現代的な課題に対して、どれだけの理論的寄与を果たしうるかを総合的に考察する。)

：フランクフルト学派による「コミュニケーション理論」の展開に関する研究

(1) 普遍的な語用論的条件によって基礎づけられた討議の場、ならびに、そういった公共的場面における合理的な合意形成に主眼を置くハーバーマスによる「討議理論」の展開に対しては、それが示す普遍主義的な性格、あるいは合理性の偏重という傾向性の是非をめくって批判的な議論が活発に繰り広げられている。この傾向を代表するアクセル・ホネットの議論を詳細に検討し、「情動的な承認関係」を基盤とした「コミュニケーション・パラダイムの人間学的実質化」という彼のプロジェクトの理論的内実を明らかにする。

(2) ホネットと同様の視点からハーバーマスの普遍主義的な討議理論を批判した思想家にチャールズ・テイラーがいる。ホネットの「承認論」はその実、テイラーの「多文化主義」の理論的基礎となっている「アイデンティティの相互承認論」を、モードによる社会心理学的知見を援用しながら、より経験的な仕方でも理論化したものに他ならない。このような心理学的手法の導入は、しかしながら、テイラーがアイデンティティの相互承認の場面において「言語的交流」のうちになお見出していた本質的な役割を、結果として軽視するに至るという事態を招来しているように思われる。このような観点を論証するために、テイラーのアイデンティティ論を支える基本的な言語観を詳細に検討し (cf., Charles Taylor, *The Politics of Recognition*, in: *Multiculturalism. Examining the Politics of Recognition*, Princeton UP, 1994.)、これをホネットの「承認論」と比較検討することを通じて、その射程と限界を画定する。加えて、

この境界線上にニーチェの言語論と「コミュニケーション理論」の接点を見出し、「情動的言語使用」をめぐる新たな問題圏の輪郭を明らかにしていく。

4. 研究成果

上記の個別的課題の遂行によって得られた研究成果は、次の三点に大別される。

「情動」をめぐるニーチェ思想の最終的な到達点は、「身体」を無意識的に作動する諸々の衝動のヒエラルキーと見なし、その頂点に位置するわれわれの意識的かつ合理的な認知活動を、そういった衝動性の側から記述的に再構成しようとする「身体的情動性の現象学」(cf., *KSA*, Bd.11,36<35><36>, Bd.12,7<9>)にあるという観点が、彼自身のテキストに則した論証を通じて確立された。

「言語」をめぐるニーチェ思想の基本的な土台が、次の二つの独特な言語観にあることが明らかにされた。

・初期「悲劇論」における言語観：「悲劇」の俳優が用いる言語の本来的な特性が、感情の内的象徴としての「音楽」が、その外的象徴としての「身体的身振り」と緊密に結びついたものと捉えられており、それゆえ「言語」が、合理的理解の対象としてではなく「身体的共振」というしかたでの共感的受容の対象として主題化されている (cf., *KSA*, Bd.1.572ff.)

・後期「身体論」における言語観：身体を「力の変容態 (Transfiguration)」にとらえる後期思想圏においては、他者とのコミュニケーションの原基が、他者の身体と「共振 (Mit-schwingen)」し、そういう仕方でも「身ぶりを分かち合うこと (Mit-teilung)」のうちに見出され、このような対他関係の原初的な形態のうち、「言語的交流の起源」が同時に看取されている (cf., *KSA*, Bd.13,14<119>)

「言葉の共感的/身体的受容」あり方を主題化するこれらの二つの観点に注目しつつ、言語をめぐるニーチェの考察を体系的に取り纏められることを通じて、「ニーチェ言語論」の独自性が明らかにされた。

「コミュニケーション理論」を展開してきた論陣によって、これまで単なる「非合理主義」として退けられてきたニーチェ思想が、当の理論のさらなる発展に対して有意義な示唆を与えうるものであることが示された。すなわち、間主体的交流の根源的な成立条件として、情動性に根ざした「共感と感情移入能力」の必要性を強調するホネット (cf., A.Honneth, *op.cit.*, S.150.)、あるいは、そういう立場を考慮しつつ、みずから確立した討議理論を「差異に極めて敏感な普遍主義的

討議理論 (ein für Differenzen hoch empfindlicher Universalismus)」として再構成しようとするハーバース (Jürgen Habermas, *Die Einbeziehung des Anderen, Studien zur politischen Theorie*, Suhrkamp, 1996, S.7.) といった思想家たちが、「コミュニケーション」の新たなかたちをめぐって展開している現在の議論に、「情動的言語使用」の可能性をめぐるニーチェ思想が優れて示唆的であるという観点が確立された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

・齋藤直樹、「ニーチェ「言語」論の現代的
可能性」『フィロソフィア・イワテ』(岩手哲
学会編)、第四二号、二〇一一年、一～一四
頁。

・齋藤直樹、「ニーチェの「自然主義」そ
の理論的射程をめぐって」『比較文化研究年
報』(盛岡大学比較文化研究センター編)、第
二四号、二〇一四年、五一～七三頁。

〔学会発表〕(計 1 件)

・齋藤直樹、情動的言語使用の音楽的基礎
ニーチェ言語論の現代的可能性、岩手哲学
会、二〇一一年。

〔図書〕(計 3 件)

・齋藤直樹・伊藤周史・菅原潤 (編著) 『2
1 世紀の哲学史』昭和堂、二〇一一年、九七
～一一四頁。

・齋藤直樹 (他) 『科学・技術・倫理百科事
典』丸善出版事業部、二〇一二年。

・リチャード・バーンスタイン (齋藤直樹・
阿部ふく子・菅原潤・田口茂訳) 『根源悪の
系譜』法政大学出版局、二〇一三年。

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

出願年月日 :

国内外の別 :

取得状況 (計 0 件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

取得年月日 :

国内外の別 :

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者 齋藤直樹

研究者番号 : 90513664

(2) 研究分担者 なし

研究者番号 :

(3) 連携研究者 なし

研究者番号 :